

FIM

Functional

Independence

Measure

機能的自立度評価表

リハビリテーション普及プログラム第2回目、今回はFIMについて説明していきたいと思
います。

当院でも、病棟や訪問リハビリ・デイケアを利用されている患者さんが、どのような生活を送っているのかを把握する為に、FIMを利用しています。

今回FIMについての説明をすることで他職種が共通して患者さんの日常的に送っている動作・介助量を知る機会になればと思います。

本日のメニュー

- ✓ 始めに
- ✓ FIMの概念・項目
- ✓ FIMの採点方法
- ✓ 具体例

本日のメニューはまず始めにFIMとはなにか、そしてFIMを使用する理由について説明したいと思います。

次にFIMの概念・採点する項目そして、採点の仕方について、最後に簡単な採点の具体例を見てもらいたいと思います。

始めに

FIMとは？

ADLを評価する評価方法

FIMの他には・・・

Baethel Index

Katz ADL index

・・・など

まず始めにFIMとは、ADLを評価する評価方法の一つです。
ADL評価方法はFIMの他にはバーサルインデックス、カッツADLインデックスなど色々あります。

ADLとは？

- ・ 一人の人間が独立して生活する為に行う基本的な、しかも各人ともに共通に毎日繰り返される一連の身体的動作群をいう
- ・ この動作群は、食事・排泄などの目的を持った各動作(目的動作)に分類され、各作業はさらにその目的を実施する為に細目動作に分類される

まず、ADLについて説明したいと思います。

ADLとは、一人の人間が独立して生活する為に行う基本的な、しかも各人ともに共通に毎日繰り返される一連の身体的動作群をいいます。

そして、この身体的動作群は食事・排泄などの目的を持った各動作に分類され、各作業はさらにその目的を実施する為に調理や洗濯などの細目動作に分類されます。

ADL評価の目的

- ① 自立度と介護量を知る
- ② アプローチすべき内容を知る
- ③ 治療計画の立案
- ④ 治療効果の判定
- ⑤ 予後を予測する
- ⑥ 他施設・他職種との情報交換

当院では患者さんのADLを評価する為にFIMを用いていますが、ADL評価の目的とは

- ①自立度と介護量を知る ②アプローチすべき内容を知る
③治療計画を立案する ④治療効果の判定
⑤予後を予測する ⑥他施設・他職種との情報を交換するなど目的は様々です
ADLはこのように様々な用途に使用することが出来ます。

また、FIMを適切に採点できることは適切に患者さんのADL状況を伝えることに繋がるため、

非常に困難ですが間違いのないよう採点しなければなりません

FIMの概念

- ① どの疾患にも適応できる
- ② 評価者もリハビリ専門職である必要はない
- ③ 信頼性・妥当性に優れリハビリ・介護の分野で幅広く利用されている
- ④ 実際に自分で行っている動作・介護負担度を評価する

当院で何故FIMを使用しているのかというと、FIMに①どの疾患にも適応でき、②評価者もリハビリ専門職である必要はないという特徴があります。

FIMは③ADL評価表の中でも、信頼性・妥当性に優れリハビリ・介護の分野で幅広く利用されており、紫塚の2F病棟ではNs、リハビリ共にFIMを用いて

④ADL評価表で、実際に自分で行っている動作・介護負担度を評価しており、過介助にならないようにしています。

また、FIMは広く普及しているので、FIMの得点を見るだけでどのくらいの介助が必要なのか他の施設でも容易にわかることができます

FIMの評価項目

運動項目

認知項目

ここからFIMに含まれる評価項目について説明していきたいと思えます。

まず、FIMを評価する項目には大きく分類すると運動項目と認知項目の二つに分類されます



まず運動項目ですが、セルフケア・移乗・排泄コントロール・移動の4つの分類に分かれます。

セルフケアの中には食事や整容、清拭、上下の更衣動作、トイレ動作の6項目があります。

移乗の中にはベッド・車椅子への移乗やトイレ移乗、浴槽移乗の3項目があります。

排泄コントロールには排尿・排便の2項目があります。

移動には車椅子か歩行かどちらでの移動するのか、階段の移動の2項目があり、運動項目はこれら計13項目から成り立っています。

FIM 認知項目 5項目

コミュニケーション

理解
表出

社会的認知

社会的交流
問題解決
記憶

次に認知項目ですが、認知項目はコミュニケーションと社会的認知の2つの分類に分けられます。

コミュニケーションには言語の理解・表出の2項目があります。

社会的認知には社会的交流・問題解決・記憶の3項目があり、認知項目はこれら計5項目からなりたっています。

FIM 採点基準

①介助者を要するか？

②要する場合はどれくらいの介助を要するか？

⇒介助量を評価する
7点～1点

最高126点

最低18点

次にFIMで採点する基準ですが、FIMではまず①介助者を要するのか？を評価し、次に②要する場合はどのくらいの介助を要するのか、この2つの項目を把握した後、各動作の介助量を7点から1点で評価します。
評価項目全て満点であれば126点、全てが全介助である場合は18点となります。
重要な点は最低の得点が0点ではなく1点となることです。

FIM 採点方法

介助者	点数	程度
不	7点	完全自立
	6点	修正自立
要	5点	監視、準備、指示、促しが必要
	4点	75%以上自分で行う
	3点	50%以上75%未満自分で行う
	2点	25%以上50%未満自分で行う
	1点	25%未満しか自分で行わない 全介助

さきほどもお伝えしましたがFIMには運動項目と・認知項目があります。運動項目と認知項目では、採点方法が若干異なる部分があります。

今ごらんになっている表は運動項目の採点方法ですが、基本的にこの表に従って採点していきます。

介助者が不要な場合は7点・6点のいずれかになり、中でも時間を要する、装具・自助具が必要といった場合は6点となります。

介助者が必要な場合は介助量の程度によって5点～1点となります。

動作時に少しでも対象者に触れるようなことがあれば4点から1点となり、動作に移る前に準備が必要な場合・動作の仕方に指示が必要な場合が5点となります。

運動項目と認知項目の採点方法の違いは5点の部分で、違いについては後ほど説明します。

7点 完全自立

- ①何も使用せずに動作を行うことが出来る
- ②安全に行うことが出来る
- ③動作を行う際に時間がかからない

次に点数ごとの介助量について説明してきたいと思います。

- ①何も使用せずに動作が可能
 - ②動作を安全に行うことが出来る
 - ③動作を行う際に時間がかからない
- ①～③を全て満たす場合は7点となります。
- ①～③の中でひとつでもできないことがあれば点数は6点以下となります

6点 修正自立

- ①装具などの補助具が必要
- ②動作に時間を要する
(通常の3倍)
- ③安全性に配慮が必要

次に6点、修正自立についてです。

- ①下肢装具や手すり・P-トイレなどの補助具、精神安定剤などの投薬が必要の場合
- ②動作に通常の3倍程度の時間を要する場合
- ③安全性に配慮が必要な場合は6点となります

安全性に配慮が必要というのは遠めからできるかどうか見ることで
リハビリ職が見守りレベルという場合は6点となります

5点 監視、準備

- ①監視、指示、促し、準備のための介助が必要
- ②介助者が対象に手を触れる必要はない
- ③認知項目の場合は10%未満の介助はしてもよい

次いで5点の監視、準備についてです。この点数から介助を必要とします。

①対象が動作する際に監視、指示、促し、準備の為の介助が必要だが

②介助者が対象に手を触れる必要のない場合が5点となります。

また、認知項目では10%未満の介助をしても5点となり、ここが運動項目との違いです。認知項目の採点は非常に困難で採点者・時間・タイミングで大きく点数が変わることがあります。

多くの情報から、一番悪い状態を採点し、コメントとしてどのような時に出来なくなるのか、どのような状態の時できるのかなど

事細かく記載していく必要があります。

4点 最小介助

①対象に触れて介助する

②介助量は25%未満

③対象が自分で75%以上している

次に、4点最小介助についてです。

この4点から①対象に触れて介助をするようになります。

②介助量は25%未満で

③自分で75%以上している場合に4点となります。

少しでも触れるようなことがあれば4点となります

手添え程度でも介助とみなします

3点 中等度介助

①介助量は50%未満

②対象は自分で半分以上行う

次に3点中等度介助についてです。

①介助量が50%未満で

②自分で半分以上動作を行うことができれば3点となります。

2点 最大介助

①介助量は75%未満

②対象は自分で25%以上している

次に2点最大介助についてです。

①介助量が75%未満で

②自分で25%以上している場合は2点となります。

1点 全介助

- ①介助量は75%以上
- ②対象は自分で25%未満
- ③二人介助

最後に1点全介助についてです。

①介助量が75%以上

②自分で25%未満しか動作を行わない場合は1点となります。

③自分で25%以上動作できるが身体の大きさなどの理由で二人介助を要する場合も1点となります。

具体例(トイレ移乗) ①

7点

- ・装具・手すりも不要 完全自立

6点

- ・手すりを使用して移乗できる
- ・ベッド脇のP-トイレで自立している

5点

- ・車椅子の位置を変える準備が必要
- ・移乗動作を監視で行っている

次に運動項目での具体例を紹介します。

介助者不要の場合、何も使わず・触らず、かつ安全に移乗出来れば7点となります。

手すりを使用しての移乗やP-トイレを使用して自立してできるなど補助具を使用し移乗する場合は6点となります。

移乗動作中に介助することはないが、動作を開始する前に車椅子の位置換えやブレーキをかけるなどの準備が必要な場合は5点となります。

具体例(トイレ移乗) ②

4点

- ・手添え程度に触れている

3点

- ・軽く引き上げる

2点

- ・しっかり引き上げる、まわす

1点

- ・全介助、二人介助

4点から1点は移乗動作時にどのくらいの介助量が必要か、移乗動作時の動作の中でどの動作に介助が必要かを評価していきます。

介助者は手添え程度の介助で可能な場合は4点となります。

臀部を軽くひきあげる程度の介助量で可能な場合は3点となります。

立ちあがり動作や方向転換に介助を要する場合は2点となります。

最後にトイレでの排泄を行っていない(オムツ対応)、協力動作がほぼなく二人介助で行う場合は1点となります

脊髄損傷患者の中には自分で自己動尿などで排泄処理をする方がいますが、その場合、自己動尿がベッド上で自立している場合は

排尿管理7点、トイレ動作6点(導尿器使用)となり、そこから介助量の程度によって点数が下がっていきます

排便の際は、投薬で排便をコントロールし、適切な日数で排便できているのなら6点、ベッド上で自分で体位変換など適切に行えている場合は7点となります(手すりを使用して体位変換する場合は6点)。

具体例(社会的交流) ①

7点

- ・ 他人と問題を起こさない
- ・ 他人の事を考えることができる

6点

- ・ 新しい状況では引きこもるが、時間がたてば、適切に振る舞えるようになる
- ・ 精神安定剤などで安定して振る舞えることができる

5点

- ・ 集団で何かをする際に、言葉による激励を要する

認知項目の社会的交流の具体例を紹介します。

他人と問題を起こさない、他人の事を考えて行動することができる場合は7点となります。

サービスを利用して最初の方は他者と交流を図ろうとしないが、時間がくれば環境になれ適切に振る舞えるようになる場合や、うつ病などの精神疾患があっても投薬により精神状態をコントロールして安定して振る舞うことが出来れば6点となります。

集団で活動をする際に、言葉による励ましや促しなどの要する場合は5点となります。

具体例(社会的交流) ②

4点

- ・ 稀に汚い言葉を発し、注意する必要がある

3点

- ・ 物事を行う際一緒に行く必要がある

2点

- ・ 他者に暴力・暴言を吐くことが多い

1点

- ・ 他者と接触を図ろうとしない
- ・ 他者の気分を害する行動を頻回に行う

次に頻度は多くないが稀に他者を傷つける言葉を発し、介助者が注意を要する必要がある場合は4点となります。

物事を行う際、適切に行動できるように・他者と振る舞えるように一緒に行動を行う必要がある場合は3点となります。

他者に頻回に殴る・つねるなどの暴力をふるう・暴言を吐くが、注意することで適切に振る舞うことが出来れば場合は2点となります

他者と全く接触を図ろうとしない、他者の気分を害する行動を頻回に行い、注意しても適切に振る舞うことができない場合などは1点となります。

認知項目の採点は非常に困難なのでFIMの資料をながら採点を行うことをお勧めします。

おわりに

- 認知項目の評価は、運動項目に較べて分かりにくく、評価者によって点数が異なることが多い
- 評価者の接し方や、観察場面によっても点数が異なる場合がある
- 点数の誤差が大きい場合はディスカッションを行い対応し、適切な介助量を把握する

※参考文献

慶応大学 FIM講習会資料

これまでFIMについて説明してきましたが、

認知項目の評価は運動項目と比較すると、目に見えない機能を評価をする為わかりにくく、評価者によって点数が異なることが多くなります。

また評価者の接し方や、観察場面によっても点数が異なる場合も多くあります。

FIMの点数はその日の体調やその時の状況によって大きく変わってきます。

その為、点数の誤差が大きい場合はディスカッションを行い対応し、適切な介助量を把握し全体で共通の対応をしていく必要があります。

最後になりますが、今回FIMについて説明しましたが、実際に評価する場合点数づけが困難な状況が多くあります。

また、今回はおおまかな分類のみの発表となりましたが、FIMを適切に採点していくためにはより細かい知識が必要となります。

その為に、年に一回FIM講習会というものがあります。

FIMについての詳しい知識や評価基準を知りたい場合は是非参加してみてください。

次回は、身体の部位・関節、ROMとはについてお伝えしたいと思います。

ご静聴ありがとうございました。